

【講義1】はじめての古典籍 付) 書誌用語概説

かんさく
神作 研一

はじめに

古典籍とは何か一。

この講義では、古典籍を扱う際の「総論」として、「古典籍」なる術語（テクニカルターム）の確認／書誌学という学問／写本と刊本の特徴／目録のあり方／書誌記述の方法／書誌著録の際の工具書および主要参考文献の紹介を行う。

さらに基本的な書誌用語の概説を添え、合わせて現物を確認することで、【講義2】以降で展開される「各論」の導入的役割を果たすものである。

デジタル全盛の現代とは異なって、〈古典〉の場合、世界は書物の中にのみ存在する。翻って、〈いま〉をより豊かに、深く楽しく、何よりいっそう知的に生きてゆくためには、〈古典〉を十分に享受することが望ましい。『解体新書』（安永3年〈1774〉刊）や『塵劫記』（寛永11年〈1634〉刊）を挙げるまでもなく、〈古典〉はいわゆる文学だけでなく、既存の学問のあらゆる領域に存在している。その事実を重く受け止め、役に立つかどうかという貧弱なモノサシに頼らない、現世を生き抜くチカラを古典籍から感じ取って欲しい。

いまを生きる〈現代人〉のひとりとして、私もまた皆さんとともに、〈古典の楽しみ〉をカラダごと味わいたいと願っている。

1. 古典籍というコトバ

「古典籍」と似たコトバとして「和本」「和書」「和古書」「国書」「典籍」などがある。それらの語の意味を『日本国語大辞典』（第二版）（小学館）で確認した上で、『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店）に基づいて「古典籍」なる術語の意味を理解する。

◆『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）

- 和 本…①漢学とうがくに対して和学に関する本。
②唐本や洋本に対し、日本で作られ、日本風に装丁した本。和綴の本。また、日本で板をおこした本。和書。
- 和 書…①漢籍・仏典・唐本や洋書に対して、日本の書物。また、日本語で書いた書物。
②洋装本に対し、和綴の書物。
- 和古書…未立項。
- 典 籍…（和書・漢籍・仏典など）書物。書籍。てんじゃく。
- 古典籍…未立項。

◆『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、1999）

- 古典籍…古い書物の中で、特に内容・形態ともに優れているものをいう。しかし、典籍の用法同様、美術品的価値から、時代区分を含んだ学術的評価の用語に推移してきており、わが国の場合、室町時代以前の書籍を江戸時代以降のものと区分して用いたり、江戸末期以前の写本・版本全体を明治以降のものと区分して用いる場合も出てきている。（後略）（執筆 松野陽一）

2. 書誌学とは何か

Bibliography

【定義】書誌学を「書物を対象とした科学的、文化史的な研究」と規定する。

- くらべる学問である。
- 術語によって記述する。
- 何が何であるか。

【分類】（書物の内容による分類ではなくて）「書物それ自体の生成過程による分類」に従って、「写本」と「刊本」に大別する。

*ただし、刊・写の境界は微妙。

（例）取り合わせ本、補写、たんろくぼん丹緑本、かんしやほん刊写本、しょうもの抄物などの書き入れ本…。

3. 写本と刊本

写本と刊本それぞれの特徴を（図示された展開図をもとに）理解する。

【写本】○原則としてタテに連鎖する。

- 無意識による誤写／意識的な改編 → 1つとして同じ本は存在しない。
- ゆえに、諸本を系統立てることがまず何よりも重要。
- 本文が流動する → 異文・異本の発生率、高し。
- おくがき奥書の批判的読解に基づく、書写年次の確定（推定）が大切。
- 読者の絶対数は少ない。
- 外形的な諸要素（大きさや表紙の色など）は用をなさず、重要なのはあくまでも「本文」。 → 巻頭／ほんおくがき「本奥書」か しよしやくがき「書写奥書」か

【刊本】○原則としてヨコに広く展開する。

- 刊本ゆえに同じ本は存在しないと思われがちだが、実際には入れ木による修訂や版元の交替なども少なくない。 → かん いん しゅう刊・印・修の見極めが重要。
- かんき刊記の批判的読解に基づく、刊年の確定（推定）が大切。
- 読者の絶対数が多い。
- 外形的な諸要素（しよけい書型や表紙の文様・色など）が内容を規定する傾向が強い。
→ 未整理の古典籍は、本の大きさによって山分けすると、おおよそのジャンルに分類される。

4. 棒目録と解題目録—理想の目録を目指す—

棒目録と解題目録、それぞれの長所と短所を確認した上で、理想の目録のあり方を考える。

【棒目録】(例)『改訂内閣文庫国書分類目録』(国立公文書館内閣文庫編刊、1976)

○簡潔である＝少ない面積(スペース)で、大量の点数を収載できる。

○見やすい。

▽1点当たりの情報量が少ない。

→分析を経た結果の、凝縮された内容を有していなければならない。

→データの生死は、目録編纂の「方針」(凡例)に左右される。

【解題目録】(例)『お茶の水図書館蔵新修成實堂文庫善本書目』(川瀬一馬編、1992)

『中京大学図書館蔵国書善本解題』(長谷川端^{ただし}編、1995)

○1点当たりの情報量が多い。

▽長い＝厩大な紙幅を必要とするため、出版には不向き。

【理想の目録】＝分析された棒目録と、正確に記述された書誌解題を合わせ持った目録。

(例)林望^{のぞむ}・コーニツキ編『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』(八木書店、1990)

神作研一編『金城学院大学図書館所蔵日本古典籍分類目録』(金城学院大学、2002)

海野圭介^{うんの}・小川剛生^{たけお}・落合博志・神作研一編「国文学研究資料館所蔵松野陽一文庫分類目録」(浅田徹ほか編『和歌史の中世から近世へ』所収、花鳥社、2020)

★デジタル時代の目録記述のあり方はどうあるべきか…刊写の別・重さ・大きさ・書入など。

5. 書誌記述の方法

「書誌事項」と「解題事項」から成る、書誌記述の方法を学ぶ。＊推定は〔 〕で。

【書誌事項】 書名 巻数 編著者(画者)名 請求番号
書写年(書写者)／刊・印・修年(版元所在地・版元名) 書型 冊数

【解題事項】 大きさ(タテ×ヨコ)

①表紙(題籤^{だいせん}を含む)

②見返し

③前付け(序・凡例・目録…)

④本文巻頭内題

⑤構成／版式(行・字・匡郭^{きょうかく}・版心^{はんしん}・柱刻^{ちゆうこく}・訓点・丁数・絵…)

⑥尾題

⑦後ろ付け(跋・後記…)

⑧奥書^{しきご}・識語^{おくづけ}／刊記・奥付

⑨その他の特記事項(印記・旧蔵者・書き入れ・広告など)

＊備考…現物を見ながら、気づいたことどもを忘れずにメモする。

6. 書誌著録の際の工具書

- ◎『古典籍研究ガイド 王朝文学をよむために』（国文学研究資料館編、笠間書院、2012）
 - 「書誌学の手引き一本をみる・さがす前に」
 - 「奥書・識語」 日下幸男
 - 「刊記—歌書の刊・印・修」 神作研一
 - 「マイクロ資料・デジタル画像の活用」 齋藤真麻理^{まおり}
 - 「複製本・影印本の活用」 海野圭介
 - 「翻刻と校訂」 小林健二
 - 「古典籍の原本を見る」 落合博志
 - ◎「〈シンポジウム〉 奥書・識語をめぐる諸問題」 田中登・牧野和夫・武井和人・新藤協三
（『調査研究報告』17号、国文学研究資料館文献資料部、1996・3）
 - ◎「〈シンポジウム〉 刊記をめぐる諸問題」 飯倉洋一・市古夏生^{なつお}・石川了・鈴木淳
（『調査研究報告』16号、国文学研究資料館文献資料部、1995・3）
 - ◎『和書のさまざま』（国文学研究資料館通常展示リーフレット、2018）
 - *国文学研究資料館学術情報リポジトリ。
- https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3738&item_no=1&page_id=13&block_id=21
- 『日本色名大鑑』（上村六郎・山崎勝弘著、甲鳥書林、1943。染織と生活社1976復刻）
 - 『色の手帖』（尚学図書編、小学館、1986）
 - 『文様の手帖』（尚学図書編、小学館、1987）
 - 「表紙模様集成」（小川剛生・中野真麻理編、『調査研究報告』25号、国文学研究資料館調査収集事業部、2004・11）

 - 『増訂 新編蔵書印譜』全3冊（日本書誌学大系、青裳堂書店、2013-14）
 - 『新編蔵書印譜』（日本書誌学大系、青裳堂書店、2001）
 - 『蔵書印提要』（日本書誌学大系、青裳堂書店、1985）
 - 『形でひく篆楷字典』（丘襄二編、マール社、1983）

 - 『東方年表』大字版（平楽寺書店、1996）

 - 『字典かな 写本をよむ楽しみ』新装版（笠間書院、2003）
 - 『五体字類』増補机上版（西東書房、2004）
 - 『くずし字辞典』（思文閣出版、2000）
 - 『アプリで学ぶくずし字 くずし字学習支援アプリKuLAの使い方』（飯倉洋一編、笠間書院、2017）
 - 『異体文字集』（静岡県富士郡芝川町郷土史研究会編刊、1973。エース出版2020復刻）

 - 『書の和紙譜』全2冊（竹田悦堂著、雄山閣出版、1996）
 - 『繊維判定用 和紙見本帳』（紙の温度）*名古屋熱田

7. 古典籍を楽しむために—主要参考文献案内—

【目録学】

- 倉石武四郎『目録学』(汲古書院、1979)
- 長沢規矩也『図解古書目録法』(汲古書院、1974)
- 同 『新編和漢古書目録法』(汲古書院、1979)
- 同 『新編和漢古書分類法』(汲古書院、1980)
- 国文学研究資料館分類研究会編『日本古典籍分類表〈試案〉』(国文学研究資料館、2008)

【書誌学】

- ◎井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、1999)
- ◎堀川貴司『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』(勉誠出版、2010)
- ◎山岸徳平『書誌学序説』(岩波書店、2008) *原刊1977
- ◎橋本不美男『原典をめざして 古典文学のための書誌』(笠間書院、新装版2008)
- ◎中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』(岩波書店、1995。新装版2010)
- 長沢規矩也『古書のはなし 書誌学入門』(富山房、新装版1994)
- 同 『図解 書誌学入門』(汲古書院、1976)
- 同 『図解和漢印刷史』(汲古書院、1976)
- 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』(雄松堂出版、1982)
- 広庭基介・長友千代治『日本書誌学を学ぶ人のために』(世界思想社、1998)
- 川瀬一馬著・岡崎久司編『書誌学入門』(雄松堂書店、2001)
- 藤井 隆『日本古典書誌学総説』(和泉書院、1991)
- 諏訪春雄『出版事始 江戸の本』(毎日新聞社、1978)
- 今田洋三『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』(平凡社ライブラリー、2009)
*原刊1977
- 週刊朝日百科 世界の文学84『近世の出版文化』(佐藤悟編、朝日新聞社、2001)
- 中野三敏『和本のすすめ 江戸を読み解くために』(岩波新書、2011)
- 同 『和本の海へ 豊饒の江戸文化』(角川選書、2009)
- 同 『本道楽』(講談社、2003)
- ◎林 望『増補 書藪巡歴』(ちくま文庫、2014)
*『書藪巡歴』(新潮文庫、1998)に、『書誌学の回廊』(日本経済新聞社、1995)の一部を合わせ収めたもの。
- 橋口侯之介『和本入門 千年生きる書物の世界』(平凡社ライブラリー、2011)
*原刊2005
- 同 『続和本入門 江戸の本屋と本づくり』(平凡社ライブラリー、2011)
*原刊2007
- 同 『和本への招待 日本人と書物の歴史』(角川選書、2011)
- 渡辺守邦『表紙裏の書誌学』(笠間書院、2012)
- 横山 重『書物搜索』全2冊(角川書店、1978)
- ◎『書誌学展図録』(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編刊、2010) *開設50周年記念
- ◎『岩瀬文庫の100点』(西尾市岩瀬文庫編刊、2008) *創立100周年記念特別展図録

付) 書誌用語概説

基本的な書誌用語を紹介する。記述にあたっては、適宜『日本古典籍書誌学辞典』や『和書のさまざま』ほか多くの先行文献を参照したが、簡潔を旨とした。

◆奥書（おくがき）

書物の最後に記された、その書物の成立事情等を書き留めた文章。「本奥書」（ほんおくがき）と「書写奥書」（しょしゃおくがき）などがある。

◆識語（しきご）

書物の成立事情等に関わらない、後人によって記された文章。「奥書」とは異なり、書物のどこにでも記される。

◆刊記（かんき）

刊本の、多くは巻末に付された刊行年月と書肆（多くは住所を併記）を刻したもの。

◆奥付（おくづけ）

刊本の刊記部分を、後ろ表紙の見返しに刻したもの。江戸後期に多い。複数の書物に流用されることが多いので注意を要する。

◆蔵書印（ぞうしょいん）

所蔵者が、その所有を示すために押捺した印記のこと。朱文による長方印または方印が一般的だが、白文や墨文、稀に藍文・緑文もあって、その意匠はさまざまである。

◆絵入本（えいりぼん）

絵を伴った写本と刊本の総称。文を主体としたものに対して使用する。

◆絵本（えほん）

絵のみ、もしくは絵を主体とした写本と刊本の総称。奈良絵本などの写本に対しても使われるが、特に江戸期に刊行された墨印や多色摺りの刊本に対して使用されることが多い。

◆装訂（そうてい）

書物の仕立て方や製本の仕方のこと。「装幀」は誤用、「装釘」は宛て字で、「装訂」を使うべきだとする長澤規矩也説に従う。

◆料紙（りょうし）

書物の本体部分に用いられた紙のこと。

◆表紙（ひょうし）

書物の本文を保護するために、その外側に付されたもの。

〈以 上〉